



宇宙人ではなくのっぺらぼうではないかと思った。

なるほど、確かに光沢のある服を着ている。

オレンジ色のブーツにパープルでぴっちりとしたタイツを合せ、そのタイツは腹から肩、首筋までをぴっちりと覆い、しわの一つすら見えない。間接の部分は白くて幅の広いリングに覆われている。首もだ。だから皿の上に頭を乗っているような、妙にカニバルな姿に見える。

灰色の顔に表情はない。目も鼻も口も耳もない。坊主頭で、もちろんヒゲも生えていない。そのくせ人間の頭蓋の形をしっかりと模している。首から下だってそうだ。ひよろひよろとして小さいが、これはどう見たって人間の肢体だ。

「かあっこいい！」

クラスメイトの相葉詩織は宇宙人と手を取り合って、今にも空の彼方に飛んでいってしまいそうだった。こんなにはしゃいでいる彼女を見るのは初めてだ。いつもおとなしく、教室の片隅でお菓子を食べている印象しかない。いや、学校にお菓子を持ってくる行為自体は、おとなしくないのだけれど。ぼんやりとしていて、いつも周りに取り残されているようなところがあった。

「のっぺらぼうじゃないの？」と僕は言う。

「のっぺらぼうじゃないよ。宇宙人に決まってるじゃん」と彼女は言う。ああそうですか。ちなみにここは帰り道、住宅地の中にぽつんと取り残された公園だった。放射能のホットスポットで、付近の子供には立ち入り禁止例が出されている。町はシンとしていて、僕らの他には人っ子一人の姿も見えない。

最初に見つけたのは相葉だった。まだ真新しいブランコを、ギコギコと宇宙人が揺らしていたそうだ。逃がさないように手を繋いでいろいろと話しかけていたところを、一人で帰っていた僕に見つかった。

僕や相葉がこのへんてこな生き物にそこそこ対応できているのは、たぶん何が起きても変じゃないという世の中の雰囲気のせいだった。というか、「本当は何か起きてるんじゃないのか」という期待と不安の裏返し。

「喋るの？」

「喋らないよ、口、ないのに」

見れば分かるでしょと言いたげに、相葉は僕を軽蔑の目で睨む。宇宙人が持つ様々なコミュニケーション能力を説明してやるほど親切でもないのです、甘んじて受けておく。

恐竜やポケモンと同じぐらい宇宙に興味があった小学生の頃、もちろん僕は宇宙人にも詳しくかった。そして、恒星間移動をしてくるような宇宙人は現時点で存在しないという仮説を知った。

そのような宇宙人がいるのなら、既に宇宙の端々に向けて、斥候・労働用の「自動繁殖する機械」をばらまいているはずである。機械はねずみ算式に増え続け、既に宇宙を埋め尽くしていてもおかしくはない。それがどのような知的生命体であれ、「宇宙のマップ」を作るため、あるいは新天地の労働力にするために、その方策を取らない理由がない。

だが、人間は現時点で一つも機械を見つけることが出来ていない。

過去の無限に近い時間において一度もそれが成されていないからである。

よって、恒星間移動をするような宇宙人は存在しない。

その仮説を知ってなんとなく萎えて、そのまま宇宙への興味は尽きてしまった。僕は飽きない程度にゲームをし、携帯を通じて卑近なネットの海に溺れ、夢中になり、気が付けば中学二年の半分が過ぎようとしていた。

なんでも疑う癖がついた。

だから今ひとつ、宇宙人と遭遇してもぴんと来なかった。

目の前で相葉と手を握り合っただけでオクラホマミキサーを踊らされているこれが、宇宙人が世界把握のために繰り出した「自動繁殖する機械」だとするなら。

あるいは「宇宙人」そのものだとするなら。

あまりにも人間に似ているような気がしてならないのである。

「人間に似過ぎてて、信ぴょう性がないな」と僕は思ったままを言った。

「手足が二本ついてるだけで、信ぴょう性がないの？」と相葉は怒る。

「のっぺらぼうって方がありえないよ。妖怪なんているわけないもん」

うん、確かに僕は妖怪ものの漫画が好きで、その方向に持っていこうとしていた。その点については謝らなければならない。

「でも、これが宇宙人だと安易に認めるわけにはいかないな。目に相当する器官がないってことは光で物を感知しないってことだし、耳に相当する器官がないってことは振動で物を感知しないってことだろ。そんな生物が宇宙を超えられるとは思えない」

「それこそ人間の常識でしょ」と相葉は宇宙人に抱きつく。「私に合わせて踊れるし、リズム感はあるんだよ」

僕は宇宙人に近づいて、顔に一発デコピンを食らわす。

「ちょっと、何してんのよ」と相葉が僕を蹴る。「怒ったらどうすんの。地球が滅亡するんだよ！」

そんなことで滅亡するんならしてしまえと思ったが、口には出さなかった。

宇宙人は怒った様子もなく、よけようとしなかった。

「僕らは」と僕はしっかり口を開けて言った。「こうして言葉で相手のことを理解する。わかる？」

宇宙人は何も反応しない。

こんなやり方じゃダメか。

僕は相葉に相談して、古典的なやり方を試してみることにした。

「あなたは、女ですか」

相葉は首を縦に振る。

「あなたは、男ですか」

相葉は首を横に振る。

宇宙人が二進法を理解しているなら、今ので検討がついたはずだ。

相葉も僕と同じ質問をする。僕は男として首を縦に振る。

この対応関係を理解して貰えただろうか。人間には雌雄の別、個体の差異があり、それぞれ独立した思考回路を持っているのだが、言語によって情報を共有することができることを。

別に僕らが地球代表って訳でもないことを。

そもそも誰も代表できないのだから、いちいち瑣末なことに怒ったりわめいたりして欲しくないことを。

「通じてるのかな」

僕は宇宙人の周りをぐるぐると観察する。後ろから見てもぴっちりしたタイツだった。宇宙服なのだろうか。

「そうか、宇宙服を着た人間も、のっぺらぼうだ」

「……脱がす？」と相葉がやる気を見せる。彼女の中では「殴る」はアウトで「脱がす」はセーフらしい。中学生女子の性欲がどれぐらいなのか、僕にはピンと来ない。

「脱がそう」と僕は言った。「そのうち大人に見つかって、大騒ぎになる。そしたら僕らが宇宙人に触れる機会は、たぶんもうない。今のうちに出来ることはなんでもやる」

僕と相葉は二人して宇宙人を脱がしにかかった。ところがタイツは恐るべき耐久力を秘めていて、二人がかりで引っ張ってもびくともしなかった。宇宙人は特に抵抗せず、されるがままにされていて、それがまた不気味だった。

灰色の頭部も何かに覆われているのは確からしかったが、引っ張ってもくによりと伸びるばかりで、手応えがない。

「ダメだね。ごめんね」と相葉は宇宙人の頭を撫でる。「かわいそうにね、目も耳も鼻も口もないなんて。でもヘレン・ケラーだって、意思の疎通さえ出来ればなんとかなったのよ」

そうして相葉はオクラホマミキサーを踊る。宇宙人もそれに倣ってひよこひよここと踊りだす。

「踊り……重力？」

重心の移動によってコミュニケイトするタイプなのか？

そうだとしたらおてあげだ。僕はまったく踊りが踊れず、相葉も下手くそなオクラホマミキサーしか踊れない。

「重力って？」

「ブランコに乗ってたんだよな。ブランコと踊り。運動には敏感なのかなと思ったんだ」と僕

は言った。「重力は何処にでもあるし、どんな物体とも影響し合うからね。それそのものを感知できるなら、微細な動きだけで意思の疎通ができるのかもしれない。例えどんなに遠くのものであろうと、僕らは互いに影響しあっているんだ」

「なら、わざわざ地球に来る必要なくない？」と相葉が正しいことを言った。

僕はその言葉で、「自己増殖する機械」の仮説が間違っていたことに気がついた。

重力を精密に観測しさえすれば、だいたいのものは見えてしまうのだ。

わざわざとてつもない時間をかけて、機械の報告を待つ必要が何処にあるだろう。

「……うん、そうだ。地球に来る必要なんてない。これっぽっちもない。じゃあどうしてここに居るんだろう」

「そりゃ、一度来てみたかったとか」

「大いにありうる」と僕は頷く。

僕だって行けるものなら、住めそうな惑星を順繰り見て回りたい。

「きゃあ！」と背後で悲鳴が上がった。

見知らぬおばさんが買い物袋を取り落としていた。

「あ、あんたたちそれ、誰、変質者!？」

僕と相葉は顔を見合わせて、しらけた。人によって説明機能は違う。相葉は宇宙人、僕はぬりひょん、そしてこのおばさんは変質者。見えているものは同じなのに、受け取り方には随分と差がある。

何もかもを「人」に押し付けるおばさんの態度が、とても狭苦しくて嫌だった。

おばさんは止める間もなく警察を呼んで、僕らに「出てきなさい」と言った。「放射能のホットスポットだって、知ってるでしょう。入っちゃダメよ」

宇宙人がふわふわと空に浮き上がる。

それで人間でないことは確定し、僕と相葉は安心する。

「やっぱり重力使いだったのね」と相葉は言う。

「そうだ。たぶんあいつは、僕らの中身——電気信号のことはてんでわからないけど。それでも僕らが預かり知らない何かを読み取ってるはずだよ」

——いや、電気にも、重さはあったっけ。

宇宙人はどんどん僕らから遠ざかっていく。それはやってくる警官たちのせいかもしれないし、放射能のせいかもしれない。おばさんのせいにするとおばさんを怒らせた僕らのせいになって、そもそも宇宙人がこんなところにやってくるのが悪いんだという意味のない結論になるので、そうはしない。

僕と相葉は公園を駆け出して、宇宙人の後を追う。もちろんベクトルの向きが違うので、追いつくことなんて出来ない。もう点のようにしか見えない宇宙人を、相葉はずっと見上げ続けて、

僕は信号が気になって視線を下ろしてしまう。おかげで二人とも、命が助かった。

「人間に似ていたのは、一緒に踊るためだったんだよ」と相葉は空を見上げて言う。

「そうかもしれない」と僕は頷く。

一緒に踊れなかった自分に、少し苛立つ。

僕は生涯、相葉のことを少しだけ羨ましく思うのだろう。

信号を渡ったのを機に、僕は話題を変えた。

「仮に僕らが自動繁殖する機械だったとして。これから宇宙を埋め尽くすのだとして、だよ。あの宇宙人とまた遭遇する日が来るだろうか」

「もう遭ってるし、また遭うんじゃないの」と相葉は正しいことを言った。

いつもお菓子ばかり食べてるくせに、どうしてこいつは正しいことを言うんだろうと、疑問に思った。

たぶん、物を食べるのが正しいことだからだ。